

# この人に聞く 石黒三沙子さん 八路軍の看護婦として

## —新中国建国期の医療に従事—



石黒三沙子さんは今年、八九才になりました。戦前、日本赤十字社の看護婦として召集されて中国東北部（旧満州）に配属されました。

昭和20年の日本の敗戦により、病院ごとソ連軍に接收、捕虜となりました。その後は八路軍（のちの中国人民解放軍）に看護婦として派遣されました。昭和28年に帰国するまで、中華人民共和国建国期の医療に従事しました。

編 集 部

その日、八月十五日

昭和二〇年八月十五日の正午、私は関東軍第20野戦陸軍病院の手術室にいましたが、その日は手術の予定がなく、窓によりかかって庭を見ていました。

庭の向こうは将校用の病室でしたが、入院中の将校がラジオにしがみつくようにして泣いていました。私はいったいなにが起こったのかわけがわからず、窓からその姿を見ていました。

その時、誰かが「いまのラジオを聞いたか！」と怒鳴りながら廊下を走っていきました。

そのうちに病院のなかで下働きをしていた中国人たちが、無言で潮が引くように各部屋からすつーと音もなく出て行きました。

まもなく看護婦も集められて日本が「戦争に負けた」ことを知らされました。

八月九日、ソ連軍が国境から旧満州に進撃してきたのでしよう、野犬が一斉に吠えだしました。

日本の敗戦後、病院丸ごとソ連軍に接收され、捕虜となりました。私たちはソ連軍の侵入する前に髪を切り落とし、軍服を着て兵隊に変装し、青酸カリを懐に

入れました。

市内で生活していた日本人の居留民は、中国人たちに台車にのせられて町中を引きずり回された人もいました。居留日本人が病院や軍の建物の中に避難するために殺されましたが、軍は民間人を誰一人中には入れませんでした。

日本人は家財道具などの品物を一切持たずに避難してきて、川原で洗面器でご飯を炊いていました。

私たち病院の軍人、軍属と患者、そして将校の家族も全員列車に乗せられました。

瀕死の患者を担架にのせて2千人の日本人は蕭々と病院を明け渡し、列車に乗りました。そのときはそのまま大連港に向かい帰国できるものと思っていました。が、発車と同時に逆方向に向かっていることを知りました。

列車は一旦走ってしばらく停車という状態で、普段は6時間程度で着くのが一週間もかかりました。日中はソ連の兵士がいたので中国人に襲撃されることはありませんが、夜になると鳶口などで列車の窓ガラスを割って中に入り手当たりしだいに荷物を奪っていきま

私たちが女は座席の下に潜り込みましたが、このとき私は母からの形見の腕時計を盗られました。瀋陽で小学校に収容されました。

その間にたくさんの傷病兵が亡くなりました。土饅頭の墓を作って埋葬しましたが、夜になると遺体が燃える鬼火(燐)を何回も見ました。

### 18歳で従軍看護婦として応召

私は和歌山県に生まれました。

日赤の看護婦は国から招集令状が来ればいかなる理由があつても拒否できないことは知っていました。看護学校では救護訓練のあとで、蕪人形を竹槍で突き刺す刺殺訓練もありましたが、戦時中でしたから何の疑問もありませんでした。

昭和18年の3月に卒業して8月1日に召集令状が来て、大阪港から病院船に乗りました。一班は看護婦20名、婦長1名、使丁1名の編成でした。

到着したところは旧満州の大連港で、船から下りると軍の係官が来て配属先を指示されました。

私たちが配属されたところは、大連から南満州鉄道で熊岳城というところにある関東軍の野戦病院でした。

野戦病院といつても本院と分院があり結核病棟もある大きな病院でした。

病棟勤務をしておりますと重症患者は本籍に病状を打電します。第1報は「病重シ」、第2報は「危篤」、第3報は「死ス」。私たちは「〇〇兵、3報打電よろしく」と庶務課へ電話しました。

入院患者は私たち看護婦を年令に関係なく「お母ちゃん」と呼んでいました。

兵隊もその頃になりますと根こぎ動員でどうして、こんな人まで兵隊になったのかと思うような状態でした。

昭和20年の初夏の頃だったと思いますが、隊長から「お前たちは2年間で招集解除になるはずだが、現下の情勢ではそれができない」といわれました。

### 八路軍（共産党軍）に従軍

共産党軍、国民党軍の双方とも看護婦等の医療技術者が不足していたのでしよう、上の方から双方に看護婦を派遣する命令が届きました。

戦争に負けたのですから、どちらでも同じです。

ところがその共産党軍から手術に熟練した看護婦が

欲しいと言うことを聞いて、敗戦直前まで手術室に勤務していましたので、指名を受ける前に申し出ました。看護婦4人に隊長1名の5人で出かけました。

むこうに着きますと、山盛りのコーリヤンのご飯と豚汁が出ました。そのうえ毛布や毛糸のセーターも支給され、驚いたり、かえって不安になったりしました。

共産党軍は国民党軍と戦いながらの行軍でしたから、私たちも時には頬を銃弾が掠めるようなことも何回もありました。

部隊のなかには国民党軍のスパイも混じっていて、国民党軍の戦闘機が飛来すると手鏡で合図をする姿を見たこともあります。

行軍するときでも共産党軍の規律の高さに驚かされるのがたくさんありました。

「人民の持ち物は糸一筋、針一本といえども盗んではならない」と教育され、これに違反した者はみんなから徹しく批判されました

行軍中はよく農家に寝泊りしましたが、帰りには掃除をして、借りたものを返し、水瓶を一杯にしてお礼を言つて退去しました。

私たちは旧満州から今の内モンゴルまでの広い地域

を八路軍について行軍しました。内モンゴルの草原地帯や砂漠も歩きました。

大興安嶺山脈の近くにもいきました。このあたりは氷点下30度にもなり、マスクをしていますと顔に貼り付いて取れません。無理に剥がすと皮膚まで剥げる、そんな厳しいところでした。

### 星の降る大草原で

ある夜、大草原地帯を行軍中、私は小用のため部隊から離れました。ところが日本と違って木立もなければ藪もありません。

困ってあちこち探してようやく窪地を見つけたところが、そこに青天白日旗を掲げた国民党の騎馬隊が迫ってきました。

私は逃げ場を失い、その窪地に身を伏せましたが、運よく馬に踏み潰されることはありませんでした。

しかし私は夜の草原のなかで部隊にはぐれてしまいました。諦めてそこで朝まで過すことにしました。ところがしばらくすると「おい」と私を呼ぶ声が出て、私を探しに来てくれました。

彼は関東軍の衛生兵で薬剤担当下士官でした。

彼はその後、私の生涯の伴侶となりました。

二人で振り仰いだ内モンゴルの満天の星空の輝きをも忘れられません。

その後も私たちの部隊は民家や地主の家を借りて宿営をしながらの行軍がつづきました。

内戦も終わりに近づいた頃、私たちは移動を終え錦州に到着することになりました。

到着したところは、砲弾の痕も生々しい旧満州赤十字病院でした。

そのとき私は23歳になっていました。私はすでに婦長になり、彼も薬局の責任者になりました。

ここでの仕事は診療活動のほかに、私たちが日本で学んだ医療知識と、戦場で体験した医療技術を中国の人たちに伝えることでした。

私たち二人は病院主催で結婚祝賀パーティーをしてもらいました。祝日勤務者以外の全職員参加の祝宴でした。生涯忘れられない思い出です。

### 思い出の地を後に、故国へ

当時の日本政府は中国を「中共」と呼んで中国との間には国交がありませんでした。

しかし日中友好協会などの民間団体が残留日本人の帰国を中国政府に働きかけていました。帰国をするのは昭和28年ですが、その前年には近く帰国できそうだと  
いう情報が流れていました。

私たちの生活は二人とも働いていましたが、生活は質素でありました。それでも賄いの小母さんを一人雇い、二人の給与の半分をそれぞれの生家に送金して  
ました。

日本人の居留民は日本人会をつくって絶えず情報を交換して  
いました。ですから国交はありませんが、日本の雑誌や新聞も読んで  
いました。日本共産党の「赤旗」(当時は「アカハタ」も読んで  
いました)。

ですから日本の敗戦後の混乱とその後の復興の状況は比較  
的によくわかっていたと思います。

日本の映画も送られてきていましたから、映画館を借りて上  
映会も開いていました。

私の勤務は半日で、あとは日本人の集会を計画したり、運動  
会や演芸会等も開いて、それなりに楽しく穏やかに過ごして  
いました。

いよいよ近く帰国できるとの情報がもたらされまし  
た。私は中国の公安局の許可をもらって、あちこちの

企業を回り日本人のつながりを呼びかけたりしました。

昭和28年になっていよいよ帰国するわけですが、集  
合場所には各地から続々と日本人が集まってきました。  
その中にはあの731部隊の技術者もいました。

舞鶴港には母が迎えに来てくれました。18歳で日本  
を出てから10年ぶりの帰国です。しかも現地で結婚し  
て息子を連れての帰国です。

私たちは、中国政府から外国人技術者として中国革  
命に貢献した「国際友人」と呼ばれていました。50周  
年、60周年の建国記念日には、招待されて大歓迎され  
ました。

いま若い人に伝えたいことは、もう二度と国の進路  
を誤らないために、政治をきちんと見て、発言すべき  
ときは発言し、そしてやらなければならないことは、  
すぐにやってほしいと思っています。それが自分を大  
切にして生きることにもつらなると思います。

これを伝えることは私の怨念であり、義務だと思っ  
ています。

〈石黒三沙子さんの歌二首〉

赤紙の舞い込みし日に青春（はる）は捨つ

われも従軍看護婦なればと

線香の匂い満つるなか独りわれ

深夜に兵の遺髪をとりぬ

（文責 小野塚恒男・大滝浩道）



読者の疑問に答えて

先号の本誌（第111号）本田貴文「子どもたちを放射能から守る世界ネットワークを立ち上げて」の70頁に「おしどりのマコ氏による『しんぶん赤旗から被ばくのことには書かないように指示された』という証言がありました」について読者から「指示された」は事実かと問い合わせがありました。

編集部は、「しんぶん赤旗」編集局に問い合わせ、「記者が原発ゼロの問題でマコ氏に取材を申し入れた際、電話によるやりとりのせいか、マコ氏に誤解されたようで、誤解を生むような言葉足らずを、記者はその後マコ氏にお詫びした」とわかりました。

そのような事実関係が明らかになったのでそのまま掲載しました。疑問をもつ読者も多いと考えてその旨お知らせいたします。

（編集部）